



interview

今 創 人

□□9

いまあじん

官から民へ、東京一極集中から地方へ、そして史上例を見ない少子高齢化社会の到来。時代が大きく動こうとしている今、「私のミッションが見えた」と志を新たにする男がいる。30代で「ウォール街最高の名譽」とされるゴールドマン・サックスのパートナー(共同経営者)となった山崎養世さん。その知性と行動力、「新・日本列島改造」のシナリオを描く。

大きな挫折

「新たな常識は混沌から生まれる」。これが山崎さんの持論だ。書籍や新聞・雑誌への執筆活動のほか、講演、対談を積極的に行い、「名ばかりの道路公団民営化ではなく、道路4公団を廃止して高速道路の無料化を」「財務省理財局の民営化こそ財政投融资改革の本丸」と、平成維新を訴える。

日本復活の処方箋は何か。8年間務めたゴールドマン・サックスを辞めたのも、「それまで日本になかったグローバル・スタンダードの資産運用ビジネスを根付かせたが、同時に大きな挫折を味わった」からだ。どうして?と思う読者も多いだろう。ゴールドマン・サックスのパートナー(共同経営者)といえはウォール街最大の名譽である。「確かにビジネスマンとして成功したかもしれない。でも、志

「新・日本列島改造」シナリオを描く

山崎 養世さん

山崎養世事務所代表 元ゴールドマン・サックス投信社長 やまざき やすよ

新たな常識は「混沌」から

「問題は政治」…平成維新を訴える



だった「日本人を幸せにするビジネス」にはできなかった」。 自問自答が続く。日本の経済は果たして本当に良くなったのか。いまだにゼロ金利が続く、年金生活者の生活も苦しい。いや、公的年金そのものが崩壊の危機にある。不良債権問題、少子高齢化で日本の財政は今や最悪だ。財投など隠れ借金を含めれば国の借金は1000兆円にも膨らんでいる。なぜだ。その解はどこにある? やがて解は出た。「問題は経済ではない。この国のシステムを決めている日本の政治にある」。02年3月に会社をやめる寸前、政治の向こう側から思わぬ要請が飛び込んできた。「徳島県知事選に出馬しないか」とい

高速道路無料化

現職知事の逮捕で行われた02年4月の徳島県知事選に打って出た。キャッチフレーズは「徳島は日本一」だった。高速道路無料化のメリットを訴えるには、悲願の本四連絡橋ができて神戸まで行くのに1万円もかかる道路料金を無料にするのが一番わかりやすい。しかし、戦いには敗れた。「勝負は勝たなくては意味がない。だが、当面の勝敗を度外視しても戦いに挑むべき時がある」。 本丸は理財局

本丸は理財局

財政投融资改革の本丸は、350兆円もの郵貯・簡保資金、そして厚生・国民年金資金を道路公団など特殊法人に貸し出す国の「銀行役」財務省理財局の改革だ。な

のに、首相が旧大蔵族議員からか、理財局問題には一向に手を付けようとしなない。「これでは無責任に政権を投げ出した最後の将軍、徳川慶喜と同じではないか」。 現在、検証中なのが72年に日刊工業新聞社から発刊された「日本列島改造論」(田中角栄著)。「明治100年を一つの節目にして、都市集中のメリットは、いま明らかにデメリットに変わった」。こう書き出すベストセラ―を片手に、「新・日本列島改造」の構想を静かに練っている。

国家は盆栽と同じ、ムダな枝や根を切らないと

屋ばかりか近くの図書館にも置いてない。しかたなく、ネットオークションで大枚をはたいてようやく4冊ゲットしましたよ」

—今の趣味はトライアスロンと盆栽とか。

「昨年11月に行われた太平洋にあるロタ島トライアスロンで完走しました。盆栽はじいさんから引き継いだんですが、人の手でムダな枝や根を切らないと死んでしまう。国家と同じですよ」

「今創人」に対するご意見をお寄せ下さい。
FAX 03・5644・7089
メール j741530@tky.nikkan.co.jp

擦に悩んでいた中曽根首相のブレンだった徳山さんの薦めでその後のプラザ合意につながる『対外貿易摩擦回避の方策』というレポートを書いたこと。しかし、バブルが崩壊。日本の会社には限界があると感じ新天地を目指した」

—これからのミッションはなんですか。

「明治から続いてきた東京一極集中を廃し、地方の自立を進めること。それには、ローマ帝国や戦後の米国のように高速道路を無料にしなければならない。今読んで『日本列島改造論』は戦後最大の経済政策本ですね。でも不思議なことに古本

理由は？

「本当は野村総研に入社する予定だったんですよ。恩師が徳山二郎（元野村総研副社長）さんですから。でも、どうしたとか、試験の時間を勘違いした。徳山さんに相談したら、『大和の方がグローバルな投資銀行への野望を持っている』と紹介された。変ですよ」

—そして、ゴールドマンに転身する。

「大和証券には感謝してま。希望した国際金融部門への配属と、経営学修士号（MBA）を取るための米国留学をかなえてくれたんですから。転職になったのは85年。日米貿易摩

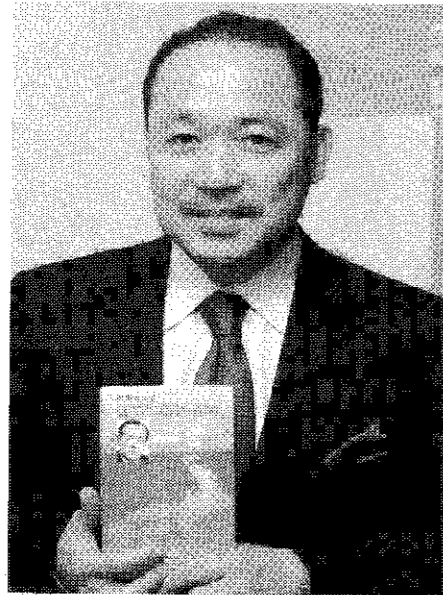
一大変革やかな経歴ですが、挫折の経験は。

「いやあ、挫折だらけですよ。選挙も落ちたし（笑い）。実は、大学も留年してますしね。裁判官だった明治生まれのじいさんや文学部教授のおやじへの反発から経済学部に入ったのに非常に違和感があった。どうして、マルクスとケインズ、両方の理論で『優』が取れるんだと。まるっきり逆の理論ですよ。この大学はウソつきだ、と思った。それからは授業に出ずに、チャーチル語録やマックス・ウェーバーを読みあさった」

—卒業後、大和証券を選んだ

プロフィール

82年東大経卒業後、ゼミで学んだファイナンス理論を生かすべく大和証券に入社。88年にカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）でMBAを取得、日本初の証券化投信を開発した。その後、米ゴールドマン・サックス前会長のジョン・コーザイン氏（現上院議員）に請われ日本での資産運用業務立ち上げを担当。98年には39歳の若さでゴールドマン・サックス投信社長に就任するも02年3月に退社、翌月の徳島県知事選に挑戦した。現在は幅広い政策提言活動を行っている。福岡県出身、46歳。



ベストセラーを片手に、「新・日本列島改造」の構想を静かに練る

文
カメラ
編集委員
八木澤徹
木本直行

（木曜日に掲載）